# 5 分割後期・二次 国語

# 国語

注意

1 問題は **1** から **5** までで、12ページにわたって印刷してあります。
2 検査時間は**五〇**分で、終わりは**午前九時五〇**分です。
3 声を出して読んではいけません。
4 答えは全て解答用紙に**HB又はBの鉛筆**（**シャープペンシルも可**）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい**。
5 答えは**特別の指示**のあるもののほかは、各問の**ア・イ・ウ・エ**のうちから、最も適切なものをそれぞれ**一つずつ**選んで、**その記号の ◯ の中を正確に塗りつぶしなさい**。
6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄から**はみ出さないように書きなさい**。
7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、**その数字の ◯ の中を正確に塗りつぶしなさい**。
9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

## 1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 打球が夏空に弧を描く。
(2) 課題を最後までやり遂げる。
(3) 大通りを自動車が頻繁に行き交う。
(4) 開校記念日に学校の歴史を顧みる。
(5) 大空に飛び立った飛行機が旋回する。

## 2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 冷蔵庫でムギチャを冷やす。
(2) 公園で新緑の美しさをハイクによむ。
(3) 入学して出会った同級生とシタしくなる。
(4) 道が分からなくてコマっている人に行き方を教える。
(5) 家事のフタンを軽減するため、早起きしてごみを捨てる。

## 3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

父の影響で写真家を目指している大学生の「僕」（大野匠海）は、自分の将来について改めて考えるため、かつて父が幻想的な蛍の写真を撮影した長野県・辰野町を訪れた。町で出会った明里の母、菜摘が経営するゲストハウス「〝月〟」で働きながら、しばらくの間、辰野で暮らすこととなった匠海は、ある冬の日、仕事の帰りに明里に呼び止められた。

「そうだ匠海、外に行こう。いいもの見せてあげる。」
「こんな時間に？」
「いいから。コート着てくるから待ってて。匠海はせっかくだから、カメラも。」
明里は〝月〟に戻っていった。僕は言われるがまま三脚と自分のカメラ、さらに菜摘さんのカメラを首からさげて外に出た。出た途端、気温の低さに焦る。僕は素早くダウンの前をしめた。
コートを着て、手袋をつけた明里が戻ってくる。
「こっち。」
すでに道を雪が覆っていた。明里が雪に足跡をつけながら進んでいく。
(1) 暗闇。のはずなのに、結構明るい。月が出ているからだ。あと、雪が白いから。明里の背中を追いかけて、木々の陰を歩いていく。
「なんか、あっち光ってる？」
「そう。もうすぐだよ。ほら。」
木々の陰を抜けると、景色が開けた。
そこは一面、光の世界だった。

白い雪が月光に照らされ、乱反射して輝いている。知っている場所のはずなのに、雪に覆われて見たことのない景色になっていた。

「すごいでしょ。」

月と雪。自然が作り出す美しさに、僕は言葉を失った。

風に乗って細かい雪が舞う。その雪の粉に月の光が当たって、空気までキラキラと輝いているみたいだ。

「これが、辰野の冬の蛍。私がそう呼んでるだけだけど。」

(2)「蛍……。」

光を反射しながら空を舞う雪は、確かに蛍が乱舞しているみたいだ。明里は以前、*川島は冬の景色が一番美しいって言ってた。こういうことかと思った。

明里が深呼吸する。僕も真似て、深呼吸する。凍てついた空気が、肺の内側を撫でるのがわかる。

*「しみるなぁ。」

と僕は言った。「しみるね。」と明里も笑いながら言った。

「この空気を吸えるのも、贅沢なんだよね。窓を開けて空気を吸えるだけで、感動する人もいるんだから。」

*沖裏さんが、やってきてすぐにデッキに出ていたことを思い出した。

綺麗な空気を吸えるこの環境を、切望する人もいる。

僕は三脚を立てて、写真を撮る。誰も足を踏み入れていない、雪景色と月明かり。

(3)「嬉しそうな顔してるね。」

明里に言われて、写真を撮りながら自分がにやけていることに気がついた。

「どうして匠海が、風景の写真が好きなのかわかった。」

「え、何？」

「自分じゃ、思い通りにならないからじゃない？」

「……それが理由になるの？」

「人生は思い通りにいかないことばかりだよ。でも、匠海はそれを楽しむことができる。だから、匠海は誰かと比べないで、最高の瞬間が訪れるのを待てばいい。風景自体は逃げないでしょ？　自分の人生だって、逃げないよ。」

(4)月明かりの下、全てが柔らかい光の中だった。

僕は黙って頷く。溶けて消えないよう、明里の言葉を胸の中に仕舞いこむ。風に吹かれ、灯火の消えかかった心の中の部屋に、パッと暖かい灯がついたようだった。

雪の中に、明里は足を踏み出す。足跡をつけて、前に進む。その後ろ姿から、目が離せなかった。

「ねぇ明里。」

こっちを向いた明里に向かって、僕はシャッターを切った。

カシャ、と音がなる。

「あ、ずるい。撮る前に言ってよ。」

「次からはそうする。」

「あ、それお母さんのカメラだ。」

「そう。フィルムだから、現像してプリントするまで確認できない。」

ちゃんと撮れているかわからない。それも、フィルムカメラの魅力の

一つだ。

「そうだ、また星のこと教えてよ。あの明るい星は？」

明里は夜空を指さして言った。冬は一等星が多いので、月があっても見える星は多い。明里が観ている明るい星は、シリウス。全天で一番明るい恒星。冬の大三角の一つ。好きな物の知識はするすると出てくる。指で辿って、前と同じように明里に教えてあげた。

僕は雪と冬の大三角が一緒に入る構図を探し、三脚を立てて写真を撮る。明里もファインダーを覗きこむ。

「星の写真って、カメラのシャッターを長く開いて、光を集めて撮るんだよね？」

「そうだね。」

「それって面白いね。じゃあ匠海は、光の配達屋さんだ。匠海が星の光を集めてきて、それを必要な人の場所まで運んでいく。」

「光の配達屋……。」

言われて考えてみれば、確かにカメラはその瞬間の光を集めて、別の場所に運ぶことができる装置だ。そんな考え方、したことがなかったけれど。

「必要としてくれる人、いるといいな。」

僕はそう独りごち*た。

「きっといるよ。」

明里は微笑む。出会った頃からそうだ。明里はいつも、僕よりずっと先を歩いていて、僕が必要としているものを教えてくれる。僕には見えないものが見えている。こんな人になれたらと思う。

---

(5)「ありがとう。」

自然とそう、こぼれるように言葉が出た。

「何に対して？」

と訊き返される。

「なんか、こう、全体的に。」

「何それ？」

明里はくすりと笑った。

「来年の夏は、一緒にゲンジボタル見に行こうね。ほたる童謡公園の。」

「うん、夏の蛍も見たい。僕はまだ、あの公園に蛍がいるのを想像できない。」

「見たらきっとびっくりするよ。すごい数だから。」

「楽しみだな。」

明里と一緒にいられて、僕は幸せだと思った。

（河邉徹「蛍と月の真ん中で」による）

〔注〕川島――辰野町にある地区。

しみる――冷える。凍る。

沖裏さん――ゲストハウス〝月〟の長期宿泊客。

独りごちた――ひとりごとを言った。

〔問1〕(1)暗闇。のはずなのに、結構明るい。月が出ているからだ。あと、雪が白いから。明里の背中を追いかけて、木々の陰を歩いていく。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　思いがけない寒さで明里と話すこともできず黙って周囲を見渡している「僕」の様子を、時間の経過とともに説明的に表現している。

イ　月の光に照らされて鮮やかに浮かび上がる明里の後ろ姿を、月の光や雪を真っ白なキャンバスに見立てることで写実的に表現している。

ウ　明里の後を追って歩きながら捉えた周囲の状況について「僕」の心に浮かんだことを、短い文でテンポよく連ねて印象的に表現している。

エ　ぬかるんだ雪道の上で明里の姿を見失うまいと必死に後を追う「僕」のあせりを、たとえを用いることで象徴的に表現している。

〔問2〕(2)「蛍……。」とあるが、この表現から読み取れる「僕」の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア　月の夜空を舞う雪を、蛍に見立てた明里の言葉に感銘を受け、自分の言葉をつなごうと景色を前にあれこれ思案している様子。

イ　目の前の壮大な景色に感じ入りながら、雪を蛍にたとえた明里の言葉を振り返り、以前見た美しい雪景色を思い出している様子。

ウ　普段とはまるで違う、厳かな姿を見せる景色に畏怖の念を抱き、明里の言葉にも集中できないほど自然の力に感服している様子。

エ　月の光に照らされて輝く雪を、冬の蛍と言った明里の言葉をかみしめながら、眼前に広がる美しい冬の景色に引き込まれている様子。

〔問3〕(3)「嬉しそうな顔してるね。」とあるが、明里がこのように言ったわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　辰野の美しい雪景色に接してすぐに撮影しようとしている匠海に対し、撮影をする前に対象を冷静に見つめさせようとしたから。

イ　冷たく澄んだ空気を全身で感じながら、写真に撮りたいと思えるような美しい景色と出会った「僕」の喜びが表情に表れていたから。

ウ　なかなか味わうことができない辰野の冬の空気を、宿泊客と一緒に楽しんでいる「僕」の満足感が表情に表れていたから。

エ　辰野の冬の景色が凍り付くほど冷たくきれいであることを、匠海から教えられたことに明里は嬉しさを感じているから。

〔問4〕(4)僕は黙って頷く。とあるが、このときの「僕」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　風景を撮影することと、人生とを結び付けて話す明里の言葉をかみしめ、自分の心にしっかりととどめようとする気持ち。

イ　「僕」が風景写真を好む理由を分析し、新たな写真の撮り方を提案してくれた明里に感謝し、改めて風景を楽しもうと思う気持ち。

ウ　「僕」の写真を肯定的に捉え、待つことの大切さを伝える明里の言葉に納得し、写真に真剣に向き合いたいと思う気持ち。

エ　本当は風景以外のものも撮りたいという思いを、鋭く見抜いた明里に感服し、風景の魅力を今一度確認しようと思う気持ち。

〔問5〕(5)「ありがとう。」とあるが、この表現から読み取れる「僕」の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア　自分が想像もしなかった考えに感銘を受けたことから、これからどのように生きていくことが最善か、明里の見解を待っている様子。

イ　自分の写真が誰かに必要とされるか心配していたが、明里に星空の写真を褒められたことで、星空を専門に撮ろうと決意している様子。

ウ　自分とは異なる視点から、自分が必要としている言葉を伝えてくれた明里に対する感謝が、無意識のうちにあふれ出ている様子。

エ　星座を写真に撮ろうとする自分の姿を、絶妙な比喩で表現した明里に対して抱いた嫉妬と羞恥心とを何とか隠そうとしている様子。

---

**4**　次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

建築は閉じられ、また開かれる。人、風、光、景色、時には木の葉や蝶(ちょう)に対して開かれまた閉じられるのが建築である。何に対して、何時、どのように開かれ、閉じられるのか、これが建築の空間の特徴を決定している。それを決めるところに、建築をつくる面白さがある。（第一段）

空間の開放と閉鎖の問題は、面白く、それだけに様々な問題が重なりあい、からみあった複雑な問題である。しばしば、これは開放的な空間で、あれは閉鎖的な空間だと言うような割り切った分類がなされるが、それは、空間の部分的なある面、あるはたらきについて断言されているので、全体を正しくとらえていないことが多い。それでは、建築の、多様にからみあった問題を、全体として捉える面白さが失われてしまう。（第二段）

よくあるそうした単純な見方のひとつは、西洋の建築は閉鎖的で、日本の建築は開放的だとする見方だ。たしかに、囲っている壁に注目した時、厚く重い組積造(＊そせきぞう)の壁に囲まれた西洋の空間は閉鎖的で、薄く軽い紙や木の板で囲まれた日本の空間は開放的だと感じることは当然だろう。しかし、その主なる囲いの開放性・閉鎖性は、他の部位での、異なった種類の開放性・閉鎖性と、組み合わされている。たとえば、日本の空間の床は、外の地平から一段高く持ち上げられ、そこで履(はき)ものを脱がねばならないことによって、空間を強く区切っている。従って、西洋の屋内にいる人が、談笑しつつ、時には男女が組んで踊りつつ屋外に流れ出ていくようなことは、日本の伝統的住居空間においては不可能だ。(1)床と壁は、日本・西洋それぞれの場合において互(たがい)に他の開放・閉鎖の度合(どあい)を補いあっているということがわかる。（第三段）

問題は、さらに複雑に重なりあっている。空間は、ただ単に一枚の壁で包まれている場合は少ない。何枚もの重なりでつくられていくのが普通だ。たとえば建物の壁が、そのまわりを塀や垣根、あるいは樹木で囲まれるといった場合のように。それを、バラバラにして個別に見るのではなく、同時にとらえるなら、たとえば、西洋の住宅は、室内を外に見せるように構えることが多い。その時、たとえ塀があっても、それは、見通しのきく鉄柵等の場合が多いのに対し、日本の開放的な木と紙の住居は、閉鎖的な高い塀で囲まれることが多い。（第四段）

明治の初めに日本に来て興味深い観察記録を残した博物学者、エドワード・モースは、町の通りを歩いている時「日本の住居が閉鎖的で全く中の生活が見えない」ことを驚き、興味深いスケッチを残している。（第五段）

あるいは反対に、それまでの西洋の建築の伝統が、あまりにも権威主義的で重々しいと考えた*モダニズムの建築は、「開放的空間」、「開放的平面（オープン・プラン）」あるいは「普遍的空間（ユニバーサル・スペース）」といった空間の開放性を強調することで、建築の革新を目指したが、それも極端に片寄ったものとなった。たとえばオランダに始まった*「デ・ステイール」の運動がある。彼等は、それまでの建築をまずバラバラに分解することを試みた。リートフェルトが一九二三年に発表した計画案において、住居の囲いは、いくつもの平面に分解されている。彼等の意図は、十九世紀までのあまりにも硬直化した空間概念と設計理念をもう一度新しくとらえ直すことにあったとも言えよう。しかしその理念は、紙の上でしか示し得ず実現した住居は、中途半端なものに終った。華々しい「宣言」や「主張」の言葉がどのように叫ばれようと、紙の上のプロジェクトがどのように描かれようとも建築空間が、完全に開きっぱなしで、存在することは不可能なのである。（第六段）

ドイツのミース・ファン・デル・ローエも、同じような考えを煉瓦の壁で試みた計画案をつくった。この*ドローイングそのものは、デ・ステイールの画家達の作品に似て美しいと思う人もいるかもしれない。しかし、この中に身を置くことを想像して、そこに自分の空間を見出すことは難しい。ミースは、後にアメリカに渡り、イリノイ州に四面透明ガラス張りの「ガラスの家」を建て、開放的空間の純粋な実現として注目を集めた。しかしこの空間は一見透明で視覚的には極めて開放的とも言えるが、全体はガラスの箱のように固く閉じられ、更にその箱は森の木々で包まれ他から完全に閉じられているとも言える。果たしてこの空間は閉じているのか。開いているのか。どちらに解釈するにせよ、この中で、自分の居場所をみつけ優しく憩うことのできる人はどこにいるであろうか。現に、評論家達の賞賛とは別に、*施主ファンスワースは建築家ミースを訴えたという話も残っている。（第七段）

ミースに心酔し、彼の方法で多くの建築を実現した、アメリカのフィリップ・ジョンソンは、ミースのガラスの家を模範にした住宅をいくつも建てているが、注意深く観察するならば、それらの住宅は、いずれも、開放的なガラス張りの居間を、極めて閉鎖的な石造りあるいは煉瓦造りの寝室との組み合わせで成立していることがわかる。すなわち、ある部分の開放性は他の部分の閉鎖性で補われていることで、住居としての条件はなんとか成り立っているのである。（第八段）

モダニズムの亡霊は、残念ながら今日でも生きている。「開放的な空間」、「誰でも自由に出入りできるオープンな施設」、「はたらきが固定されず、誰でも自分の居場所が見つけられる空間」……等々の主張は、建築の雑誌の誌上から役所の広報に至るまで、あちこちに氾濫している。(2)結果的に建築は、人を落ち着かせず、町はますます無秩序なものとなっていく。（第九段）

もう一度、しっかりと、空間の意味が捉え直されねばならない。私は、私の空間に包まれている。あなたは、あなたの空間に包まれている。私とあなたが、同じ空間に包まれている時もある。共にいる、とはその時のことを言う。家族、共同体、とは、同じ空間に包まれている人のことを言う。（第十段）

私を包み、私とあなたをひとつに包む空間をつくるのが、建築だ。私は、その空間の中で、安らぎ、憩い、自分の行うべきことを行い、自分が自分であることを確かめる。建築空間とは、そのように人を包むものである。たとえ、華やかに人目をひいている建物であっても、その空間があなたを優しく、暖かく包み、そしてあなたがそこに留まっていたいと感じられないものであったら、それは良い建築ではない、と言い切ることにしよう。（第十一段）

自分の空間を、しっかりと持っている人は、そこから出て外とつながることができる。それがない人は、外とつながっていくことが難しい。それは、自分の考えを持たない人が、他と意見を交わすことが難しいことに通じている。部屋と部屋がうまくつながって住居ができ、家族ができる。住居と住居がうまくつながって、町ができ、共同体ができる。(3)良き町、良き都市とは、そのように生まれ、育っていく。そのように部屋とは、人間を育て、建築をつくり、都市をつくっていく、基本なのである。（第十二段）

（香山壽夫「建築を愛する人の十三章」（一部改変）による）

〔注〕 組積造――ブロックなどを積み上げる建築構造。
モダニズム――伝統主義に対抗して常に新しさを求めること。
「デ・スティール」の運動――二十世紀初頭のオランダで、建築などに抽象的表現を取り入れることを目指した運動。
ドローイング――製図。
施主――建築や設計などを依頼した人。

〔問1〕 (1)床と壁は、日本・西洋それぞれの場合において互に他の開放・閉鎖の度合を補いあっているということがわかる。とあるが、このように筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 日本と西洋の建築は、形は異なるが壁と床の素材は共通しており開放性と閉鎖性の組み合わせの度合いも同じだと考えているから。
イ 日本でも西洋でも、建築において空間はある部分の開放性や閉鎖性を他の部分で補うことで成立していると考えているから。
ウ 木や紙でできた日本の住居と同様に、西洋の住居は開放的であるが床の構造によって空間を強く区切っていると考えているから。
エ 近代建築は日本建築の開放性と、西洋建築の閉鎖性とが互いに補いあう特徴を持って造られていると考えているから。

〔問2〕(2) 結果的に建築は、人を落ち着かせず、町はますます無秩序なものとなっていく。とあるが、「結果的に建築は、人を落ち着かせず」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　開放的な建築が、世の中に広まった結果、建物は自由に出入りできるものとなり生活の安全を感じられなくなってしまうということ。

イ　美しい空間づくりを目的とした住居が増えた結果、住居としての実用性がなくなり、生活に不便を感じるようになったということ。

ウ　人々が開放的な建築空間を希求することで、外に開かれた建物が増え、住居に必要な静けさを感じられなくなってしまうということ。

エ　空間の開放性にとらわれると、建築は平穏を感じられないものとなり、人は建物に居場所を見つけられなくなるということ。

〔問3〕この文章の構成における第十一段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　それまでに述べてきた、空間の開放と閉鎖の構造上の関係を踏まえ、空間がもつ意味を示して文章全体の結論に導いている。

イ　それまでに述べてきた、現代的な建築がもつ空間の在り方に関する事例に対して、それを完全に否定する見解を示している。

ウ　それまでに述べてきた、開放性を突き詰めた理想の建築を実現するため、具体的な事例を列挙して自説の妥当性を強調している。

エ　それまでに述べてきた、西洋建築をとらえ直す運動の妥当性について、根拠となる事例を付け加えて問題解決の手順を示している。

〔問4〕(3) 良き町、良き都市とは、そのように生まれ、育っていく。とあるが、このように筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　自分の空間をもたない人でも、外につながりを求めることで、町や都市などの共同体の中で自己を確立できると考えているから。

イ　空間的に開かれた環境で生活する家族が、つながりをもつことで、町や都市などの共同体の結びつきが強固になると考えているから。

ウ　人が安らぎ、自己の存在を確認できる空間が互いにつながることで共同体が生まれ、町や都市が成熟していくと考えているから。

エ　閉鎖的な自分の空間に住む人が、外に出て建築から開放されることで、町や都市などの共同体をつくり変えていくと考えているから。

〔問5〕国語の授業でこの文章を読んだ後、「自分の考えをもつこと」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

**5** 次の**A**の文章は、「土佐日記」に関する対談の一部であり、**B**の文章は、「土佐日記」について書かれた文章である。また、**C**は、**A**で取り上げられた「古今和歌集」の「仮名序」の原文であり、［　　］内の文章はその現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

**A**

**石川**　日本語というのは非常に末梢（＊まっしょう）表現が肥大化した言語なんじゃないかと考えています。助詞や丁寧語、尊敬語など末尾の表現のヴァリエーションが多く、話し手が何を選ぶかで言葉の意味さえ変わってくる。例えば「思いますのよ」という言葉の「のよ」に、話者の属性や感情について、非常に重要な意味がこめられている。話者は男か女か、相手は目上か目下か。そしてそのヴァリエーションは、言語への繰り込み力の高いひらがなができたことで、どんどん広がったのではないかと思っています。漢文では表せない微妙なニュアンスがひらがなによってつけられるようになったのでは、と。

**小松**　貫之（＊つらゆき）が『土佐日記』(1)をひらがなで書いたのは、まさにそういう理由からだと思います。貫之は漢文を自由に書けたはずですが、ひらがなじゃないと心に感じたとおりには書けない。そういう歯がゆさ、焦燥感があったんじゃないでしょうか。

**石川**　それがひらがなを作りあげていく原動力になった。

**小松**　ひらがなの表現力について貫之の考えが端的に表現されているのが、『土佐日記』の冒頭のセンテンスです。「をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみんとてするなり」。たいへん有名ですが、とてもちぐはぐな表現の文章です。(2)そもそも書き出しの「をとこも」は「をとこの」でなくてはおかしいでしょう。『古今集』仮名序のような名文を書いた貫之が、これほどぎこちなく味気ない文章を書くのはおかしい。何かあるなと考えてみたら、「をむなもしてみん」という重ね合わせが浮かび上がってきた。「をむなもし」とは「女文字」すなわち、ひらがなです。『古今集』の巻第十にまとめられている「物名（もののな）」の手法と同じですね。

物名というのは、例えば「桔梗（きちかう）の花（はな）」という隠題を〈あきちかうのはなりにけりしら露のおける草葉も色かはりゆく〉というふうに歌に埋め込む。『土佐日記』では「をとこもすなる」という言葉遣いの不自然さで、隠した語があることを気づかせようとしたのでしょう。「をとこもすなる」も、不完全ながら「をとこもし」の重ねあわせです。日記は普通、男文字で書くけれども、私は「女文字」で、つまり日本語の表現のままに書き表そうという宣言なのです。さらにその宣言の中で、ひらがなを運用するとこういうこともできるんだぞという見本も同時に示している。漢字ではできない芸当です。

**石川**　私は男＝中国、女＝こちらの国という東アジア漢字文化圏共通の認識から、漢文の日記を女手（ひらがな）で書こうという意識だと解読しましたが、先生の話は具体的で、実証的です。女手という言葉は『宇津保物語（＊うつほものがたり）』や『源氏物語』にありますが、女文字という言葉もあるのですか。

**小松**　『土佐日記』にしかありません。『土佐日記』には、あとのほうに「男文字」が出てきますが、これも他の文献には出てきません。このほかにも貫之が作った言葉はいくつもあるようです。後世と意味が違いますが「まくらことば」（序文の意）。それから「やまとう

た」なども、おそらく彼の作った言葉です。

**石川**(3) 《秋萩帖*》との関連で考えるのですが、みそひと文字というのはいつからの言葉ですか。

**小松** 正確には突き止めていません。『古今和歌集』仮名序では「みそ文字あまりひと文字」です。「みそひと文字」は中世以後でしょうね。ひらがなにとって幸いだったのは、「かりそめの文字」として位置づけられたことです。世界のどの国でも、読めること、そして書かないことが教養ある女性のたしなみだった。中国に女性の詩人なんてほとんどいないでしょ。だけど日本では、ひらがながかりそめの文字であったために、女性も自由に書くことを許された。それが平安時代の仮名文学作品です。

**石川** 女手つまりひらがなによって、世界でいちはやく文化的には、識字女性はものが言えるようになった。もっとも漢学・漢文、つまり政治と思想からは締め出されつづけましたが。

**小松** 自由自在に使えるひらがなが日本語の表現を豊かにした。漢字文と仮名文という二段階が目的に応じて使い分けられていたのは、日本語にとって素晴らしいことと思います。

（石川九楊、小松英雄「ひらがな対談」による）

**B**

『土佐日記』の書き出しは、広く人口に膾炙*している。

男もすなる日記といふものを、女もしてみむ、とて、するなり。

（十二月廿一日）

《男も書くと聞いている日記というものを、女の私も書いてみよう、と思って書くのである》

というようなものが、いわゆる一般的な解釈である。それに加えて、「女もし」の部分に「女文字」が重ねられており、そこから「男もす」の部分には「男文字」が透けて見える、ということを熱心に主張したのは小松英雄であった。

「女もし」が女文字であることはわかるとしても、「男もす」が「男文字」であることには疑問が残るかもしれない。(4) しかし、「男がすると聞いている」であれば「男のすなる」でよいわけで、「も」を使っているのは男女を併置するため、という説明では物足りない。併置されているのは「女文字」と「男文字」である、と考えれば、確かに納得がゆくのである。

言葉で心を表現する営みの中で、当代人にとって音の響き合いがどれほど重要なものであったかは繰り返し述べてきた。また、音は完全に一致している必要はなく、特定の音を連想させるだけで充分にその機能を発揮するケースも少なくない。したがって、ローマ字表記で見てみれば、onnamoshi を念頭に置いた上で otokomos という音素が連なった時点で、「男文字」は充分に連想され得たと言えるのである。

書き出しの文にこの解釈を盛り込んでみると、

《男も書くと聞いている（漢文の）日記というものを、女の私も（仮名文で）書いてみよう、と思って書くのである》

となる。こうしてみると、「男」と「女」の対立よりも、むしろ「男文字」と「女文字」の対立に重点が置かれているように思われる向きもあるだろう。ここでもう一度「も」について言及しておくと、「女」が主語になっているこの一文では後半が強調されア ることになるので、「男文字」と「女文字」はただ併置されイているというだけではなく、どちら

かと言えば「女文字」を尊重している、ということになる。より現代風に言い換えるなら、

《漢文の日記というものもあるらしいが、私は仮名で書く》

とでもなろうか。

さらに日記を「する」という動詞も注目に値する。ほかの動詞ではなく「する」を選んだのは、むろん「男文字」「女文字」を埋め込むための選択であったとも考えられる。しかし適応範囲が広く、また純粋な行動を示す「する」という動詞が使われていることは、『土佐日記』の書き手がこの日記を実験的な仮名文の試みとして意識していることの表れでもあったのではないだろうか。

（大野ロベルト「紀貫之」（一部改変）による）

**C**

やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。

和歌は、人の心を種として、多くのことばとなったものである。この世に生きる人は、関わり合う事柄がまことに多いので、心に思うことを、見るものや聞くものに託して歌にするのである。花に鳴く鶯や、水に住む蛙の声を聞くと、すべて生あるものは、どれが歌を詠まないなどということがあろうか。

（高田祐彦「新版　古今和歌集」による）

**〔注〕**

末梢――先端、末端。ここでは文末のこと。
貫之――紀貫之。平安時代初期の貴族、歌人。
宇津保物語――平安時代中期の長編物語。
秋萩帖――平安時代の書の作品。
みそひと文字――三十一字。和歌の字数。
人口に膾炙している――広く知れわたっていること。

〔問1〕(1) 貫之は漢文を自由に書けたはずですが、ひらがなじゃないと心に感じたとおりには書けない。とあるが、ここでいう「ひらがなじゃないと心に感じたとおりには書けない」を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

**ア** 貫之は、自身の漢文の表現力では心のありさまを表現しきれないという思いから、ひらがなを用いようと考えていたということ。

**イ** 貫之は、感情を表す語が多様なひらがなを使うと、かえって感情を表現しにくくなることをもどかしく感じていたということ。

**ウ** 貫之は、末尾の表現の細かな違いで様々な意味を込められるひらがなを、早く世に広めたいというあせりを感じていたということ。

**エ** 貫之は、漢文よりも細かな差異を表現できるひらがなを用いた方が、自身の情感をより的確に表現できると考えていたということ。

〔問2〕 **A**では(2)そもそも書き出しの「をとこも」は「をとこの」でなくてはおかしいでしょう。とあり、**B**では(4)しかし、「男がすると聞いている」であれば「男のすなる」でよいわけで、「も」を使っているのは男女を併置するため、という説明では物足りない。とあるが、『土佐日記』の冒頭の「男もすなる」の「も」の特徴を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

**ア** 「も」で読み手にちぐはぐな印象を与えながら、「桔梗の花」が隠題として埋め込まれていることを表すことができている。

**イ** 「も」を用いることで読み手に「男文字」と「女文字」とを想起させ、ひらがながもつ表現の豊かさを示すことができている。

**ウ** 「も」を用いてひらがなの有用性を読み手に意識させつつ、東アジア漢字文化圏共通の認識から解放することができている。

**エ** 「も」を用いて読み手にひらがなの曖昧さを示すことで、漢文は思想を正確に伝える文学であることを暗示することができている。

〔問3〕(3)**石川**さんの発言のこの対談における役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

**ア** 貫之が作った言葉に関する小松さんの見解を受け、別の例を用いた質問を提示することで、その後の話題を焦点化している。

**イ** 直前の小松さんの発言に賛同しつつも、それと反対の内容を具体的に述べて、一つ一つの例を詳しく分析している。

**ウ** 平安時代と現代の言葉の意味を比較した小松さんの発言を受け、自身の『土佐日記』の評価を述べて、次の発言を促している。

**エ** 自身の疑問に対する小松さんの意見に対し、書との関連性から新たな疑問を示すことで、書に関する話題を展開しようとしている。

〔問4〕(5)生きとし生けるものとあるが、**C**の現代語訳において「生きとし生けるもの」に相当する部分はどこか。次のうちから最も適切なものを選べ。

**ア** この世に生きる人

**イ** 見るものや聞くもの

**ウ** すべて生あるものは

**エ** 歌を詠(よ)まない

〔問5〕 **B**の二重傍線部**ア**～**エ**の「れ」のうち、他と意味・用法の異なるものを一つ選び、記号で答えよ。